

貨幣論の提起する 方法論的問題をめぐって

梅澤直樹

Naoki Umezawa

滋賀大学 経済学部 / 教授

I 序

グローバルマネーの動きが世界経済の動向を、したがってそのうちに組み込まれた各国の経済動向を大きく揺さぶるようになって久しい。だが、M.アグリエッタらの言葉を借りれば、現代の標準的経済学はそうした動きを「外延的で、純粋に数量的な方法」により説明しようとし、「マネー・サプライについての経験的な定義」を次々と打ち出しはしても「貨幣現象の本性を問わない」¹⁾。それでは事態を真に理解することも抜本的な対策を講じることも困難であろう。こうして、貨幣とはそもそもいかなる存在なのかを追求した異端の経済学の系譜が目されることとなる。

そうした異端の貨幣論を体系的に展開した人としてまず想起されるのはマルクスである。商品経済のもとでは貨幣という社会的特権物がなぜ存在することになるのかを繙きながら貨幣の本性の解明に迫ったその価値形態論はたしかに興味深い。だが、先行する価値実体論に制約されて、そのエッセンスを曖昧化させたところがある。また、そのことは価値尺度論といった貨幣機能の論述にも影を落としていた。

この欠陥を、価値実体論を留保して流通形態論を展開するという独自の原理論構想でもって克服しようとしたのが宇野弘蔵氏である。これによ

1) M.アグリエッタ/A.オルレアン、井上泰夫／齊藤日出治訳『貨幣の暴力』法政大学出版会、1991年、3ページ。

2) 同上邦訳23、30、38ページ以下参照。

3) M.アグリエッタ+A.オルレアンほか、井上泰夫編訳「主権貨幣とは何か」『環』藤原書店、2000年vol.3、70-71ページ。

4) アグリエッタらはルネ・ジラルールのミネーシス模倣概念を駆使して貨幣の導出を図っているが、貨幣の本性は私的所有者たちによる社会の形成というところに発するものであり、その「私的所有」を「他人の活動の成果を数字の型式で占有しようとする欲望」と捉えたのでは、私的所有者であるがゆえの交換者間の力の

て、上記のようなマルクスの貨幣論の限界を乗りこえつつ、そのエッセンスを継承する道筋が大きく切り開かれた。だが、宇野氏は必ずしもその原理論構成が成り立つ所以を明確にしきれていない。その結果、そのユニークな価値尺度論が本来孕んでいる可能性もまた十分に開花させられてはいないと思われる。

それに対し、マルクスが切り開こうとした商品貨幣説を否定し、むしろ貨幣を外在的、超越的に商品世界に導入しようとする貨幣的アプローチを提唱した論者にJ.カルトリエがいる。さらに、カルトリエとも共同研究を重ねつつ、興味深い貨幣論を提起しているのがアグリエッタらである。すなわち、アグリエッタらは、価値形態論には一定の評価を与えながらも²⁾、価値実体を前提してその表現形態を問うという方法を厳しく批判し、生産世界から自立した流通世界独自の問題として貨幣論を定立しようとしている。しかもそのさい、「貨幣の中に純粋に経済的な対象を見出すことは余りにも狭い見方」であって、むしろ貨幣を「社会的結合性が確認されるような集団的価値の全体」としての「権威」と不可分の存在、「社会的な帰属の決定者」として捉えようとしているのである³⁾。筆者はアグリエッタらの貨幣生成論にそのまま与するわけではないが⁴⁾、上記のような貨幣の捉え方には共感を覚える。宇野氏が提起した原理論構想の意味を

宇野説自身を超えて追求してゆけば、その切り開いた価値尺度論はまさにアグリエッタらが提起した論点と相通じると解されるからである。

くわえて、アグリエッタらの提起した論点は、たとえばN.ドッドが示した構築主義的貨幣把握と響き合うところを持っている。つまり、アグリエッタらの提起した論点は、現代思想が投げかけている認識論的、方法論的主張と絡めたときその意味がいっそう明確になると解されるのである。のみならず、カルトリエの貨幣的アプローチはレヴィ=ストロースに倣って展開された吉沢英成氏の貨幣論に通じるし、アグリエッタらが生産世界から自立した流通世界に固有の問題に即して貨幣を捉えようとしたところも吉沢説と重なるところをもっている。さらに、構築主義との関わりでは、生産世界であれ流通世界であれ歴史を超えた実体的ないし基盤的關係を想定しようとする立場はより精細に検証されてよいであろう⁵⁾。柄谷行人氏がのちにトランスクリティーク⁶⁾という造語を用いて振り返った、デリダの脱構築論を想起させるマルクス貨幣論の読み方は、この論点と重なってくる。

そこで、以下、まずアグリエッタらが提起した論点を念頭に置きつつ、マルクスと宇野氏の貨幣論を振り返る。ついで、吉沢氏、そしてアグリエッタらやドッド、柄谷氏の貨幣論を現代思想の動向に絡めて考察する。そのうえで、宇野氏の貨幣論はそ

非対称性といった核心的契機が見失われることになってしまっている。

だからまた、「使用価値と交換価値との矛盾」といった、価値実体論を前提とし均衡状態を想定してしまったがゆえに商品の帯びる潜在的社会的性を曖昧化させてマルクスがあまりこんだ似非矛盾に、そうした曖昧さの批判をめぐらしたはずのアグリエッタらもあまりこんでしまっている。『貨幣の暴力』前掲邦訳、41、47ページなど参照。

5) 構築主義の核心は本質主義との対立にあるとされるが、それは「言説の外に実在はない」ことを主張するものではない。その実在がさまざまに構造化される可能性を持っていることを主張しているのである。したがって、社会存立の

基盤的課題といったものが抽象的に存在することを認めること自体は構築主義に反するわけではない。上野千鶴子編『構築主義とは何か』2001年、286ページ以下参照。

6) 「トランス」には、カントの言う「超越論」という意味での「トランセンデンタル」に「横断的」な「トランスヴァーサル」を加えて、自己内での他者との対話、一瞬だけ感じるような微妙な差異、自らが構造化した認識への違和感を捉える感覚を表現しようとしている。

柄谷行人/浅田彰他『マルクスの現在』
とても便利出版部、1999年、118-121ページなど参照。

の原理論構想をいっそう徹底すれば現代思想どのような対話を繰り広げうると解されるかを検証してみよう。

II マルクスから宇野へ

マルクスは、当時の標準的経済学であった古典派経済学について、それが不完全ながらも価値実体の析出に成功しながら、「なぜこの内容があの形態をとるのか」を問おうとしなかったこと、「商品価値の分析から、価値をまさに交換価値となすところの価値の形態を見つけ出すことに成功しなかった」ことをその「根本欠陥の一つ」として厳しく批判し、その根源に古典派経済学の歴史意識の希薄さを見出していた。資本主義的生産様式を「社会的生産の永遠の自然形態と見誤るならば、必然的にまた、価値形態の、したがって商品形態の、さらに発展しては貨幣形態や資本形態の独自性をも見損なうことになる」⁷⁾と。

このような問題意識に立脚して、マルクスは周知のように、2商品の間で展開される「簡単な価値形態」から出発し、価値表現の媒体となる右辺の等価形態に種々の商品が配される「展開された価値形態」へ、さらに左辺と右辺が入れ替わって左辺に種々の商品が配され、それらの価値が一般的等価物としての単一商品で表現される「一般的価値形態」へ、そして一般的等価物とその機能に相応しい商品へと固化する「貨幣形態」へと順次展開しながら、商品世界に貨幣という社会的特権物が君臨する所以を解き明かそうとしていた。

そのさい、もっとも単純でもっとも目立たない姿でありながら既にそのうちに「すべての価値形態の秘密」、したがって貨幣の謎解きのエッセンス

が蔵されているとして⁸⁾「簡単な価値形態」の考察に力を注いでいる。その核心が、価値形態の左右両辺は、いわば主と奴のように、「不可分な契機」でありながら「互いに排除しあう、または対立する両端、すなわち両極」であることへのこだわりであり、なかならず等価形態の第三の特色すなわち「私的労働でありながら、しかもなお直接に社会的な形態にある労働」であることへの着眼であろう⁹⁾。商品は本来「私的」な存在でしかなく、他者に認められるか否か、つまり売れるか否か未だ定かでない不安定な状態に曝されている。しかるに、そうした商品間で社会的関係が織り上げられてゆこうとしたとき、左辺の相対的価値形態に立つ商品はそのように未だ不安定な状態に留まっているのに対して、右辺の等価形態に選ばれた商品は「直接に社会的な」形態へと、つまりもはや不確かさ、不安定性に脅かされることのない存在へと転じるというわけである。私的な諸主体が社会的関係を織り上げようとするとき、そこには必然的に非対称性が生まれることの鋭利な別決と言えよう。

このようにして、マルクスは貨幣の本性を、私的な諸主体による社会の編成という市場経済システム固有の社会関係が生み出す特権的な力の特定商品への独占的結晶化として解き明かした。だが、マルクスの価値形態論には、やはり周知のように、その展開途上で上述のような貨幣認識のエッセンスに反する要素が不用意に混入させられてもいた。すなわち、「展開された価値形態」から「一般的価値形態」への移行に際して、「事実上すでにこの列（展開された価値形態の各列）に含まれている逆関係を言い表してみれば」¹⁰⁾というように、本来その非対称性こそがエッセンスであったはずのものに逆関係が読み込まれていたのである。価値実体

7) K.マルクス、岡崎次郎訳『資本論(1)』大月書店、147、149-150ページ参照。

8) 同上邦訳、94ページ。

9) 同上邦訳、95、112ページ。

10) 同上邦訳、122-123ページ。但し、()内は引用者。

11) 同上邦訳、171ページ。

論を先行させ、実体としての抽象的人間労働を引き出した等値関係を前提してしまっていたがゆえの不用意な読み込みと言えよう。

こうした価値実体論先行の副作用は、貨幣の価値尺度機能を単に「諸商品価値を同名の大きさ、すなわち質的に同じで量的に比較の可能な大きさとして表すこと」に局限してしまった点にも現れている¹¹⁾。これでは価値形態論における貨幣形態の再論の域を実質的に出していない。宇野氏の価値尺度論、すなわち、私的主体間の取引を通じてなされる価値の尺度ないし測定は、その客観性が既に社会的に確立された物差しを用いる自然的属性の尺度、たとえば物質の長さや重さの尺度とは異質な営みであることを強調したそれ¹²⁾と比較すれば、いかにも精彩を欠いている。市場経済システムの考察にあたっては、なによりそのエッセンスとしての私的主体による社会関係の編成ゆえの特質に目がこらされるべきなのである。

価値形態論に立ち戻れば、宇野氏は、価値実体論を保留し流通形態論に純化させて、さらに交換過程論と融合させるかたちで価値形態論を展開していた。すなわち、宇野氏は、商品交換という営みは人間が相互に関係を取り結ぶさいの普遍的な形態ではなくむしろそのある発展段階に現れた特殊な形態であり、そうした特殊な流通形態が社会存立の普遍的基盤としての生産過程を包摂したところに資本主義的経済システムの本質があるという認識に立った。したがって、この経済システムの本質を把握するには、まず流通形態の考察から始めて、その展開の極北に生産過程が包摂されるにいたることを明らかにすべきという原理論の構成を構想した。こうして、価値実体論をさしあたり留保したまま流通形態としての側面から商品や貨幣が

分析されることとなった。また、その結果、抽象的人間労働という実体が既に解明されている価値の表現形態を問うというかたちをとったマルクスの価値形態論とは異なり、交換過程論と融合させて、私的な人々が相互に交換を求めて社会を織り上げてゆくとすればそこにどのような関係が取り結ばれることになり、どのような経済的範疇が生み出されることになるかを考察するというかたちで価値形態論が展開されたのである。

こうして、宇野氏の価値形態論では、展開された価値形態において等価形態に配される商品は各私的主体が交換を求める商品群であって、マルクスのそれのようにすべての商品がそこに並立するということにはならない。むしろ、頻度高く等価形態に現れる商品とそうでない商品とが分かれることとなる。のみならず、前者の中でもとくに頻度高く現れる商品は、既述の特権性をより濃厚に備えているがゆえに、つまり直接の消費対象としてではなくてもそれを有していれば交換において優位に立てるという社会的使用価値をより濃厚に備えているがゆえに、つまり等価形態に立つ頻度が高くなるというプロセスを経て、一般的等価物が絞り込まれてゆくという論理が見通せる¹³⁾。こうして、非対称性を本性とする価値形態のうちに安易に左右両辺を入れ替える契機を読み込むのではなく、つまり私的主体が社会関係をかたちづけているのだという市場経済システム論のかなめの論点を損なうことなく、一般的等価物が析出されることとなった。

くわえて、既述のように、価値尺度論も私的主体による価値の尺度というその特質に即したかたちで展開されることとなった。始源でいきなり均衡状態が前提されるのではなく、私的主体が織り上

12) 価値尺度論については自らのユニークな理論的貢献として宇野氏自身自負している。宇野弘蔵「マルクスの価値尺度論」『宇野弘蔵著作集第四巻 マルクス経済学原理論の研究』岩波書店、1974年、所収、とりわけ55ページ以下参照。なお、宇野弘蔵『資本論五十年 下』法政大学出版局、

1973年、789ページをも参照。

13) たとえば田中真晴「貨幣生成の論理」『甲南経済学論集』23-3、1983年、を参照。

げるものでありながらなぜそれなりに均衡状態がもたらされることになるのかの仕組みを説く場として価値尺度論が位置づけられたわけである。もっとも、宇野説の場合、労働力商品化の無理が強く打ち出される反面で、一般商品の需給の調節は価値尺度プロセスを通じてそれなりに実現されてゆくという理解に傾きらいがあることも事実であるが¹⁴⁾。

さらに、宇野氏は、独自の唯物論解釈に絡めて、19世紀中葉のイギリスの経済システムが資本主義的な経済の論理で自立=自律化する傾向を有していたことを重視する¹⁵⁾。その結果、そうした歴史的傾向を理念化して資本主義経済システムの基礎構造や運動を考察する原理論は経済理論に純化すべきものとなる。アグリエッタらが注目したような社会学的要素等々が排除される所以である。それに対して、マルクスは、その経済学研究の端緒においてむしろそうした要素に大きな関心を払ってきた。のみならず、その名残は『資本論』にもうかがえる。

たとえば、労働過程論では、人間労働の特質があらためて取り上げられ、蜘蛛や蜜蜂と対比しながら「最悪の建築師でさえ最良の蜜蜂にまざっている」ところがあること、「労働者は、自然的なもの形態変化をひき起こすだけではない。彼は、自然的なものの中に、同時に彼の目的を実現することが再確認されている¹⁶⁾。初期の労作である『経済学・哲学草稿』のなかの著名な「疎外された労働」断片を彷彿させる叙述である。しかも、かの労働疎外論は、現存の『経済学・哲学草稿』に見ることのできるような、さしあたり単独の労働者を想

定した人間と自然との関係論に留まるものではなかった。同時並行的に著された「ミル評注」においては、労働は消費者としての人間と生産者としての人間とを結ぶ絆であるにもかかわらず、商品経済のもとでは労働が貨幣を追い求める営利労働へと疎外されてしまうことが厳しく告発されている。すなわち、労働のみならず消費もまた自らの個性を実現し、自己が自己であることを実証する重要な営みである。だからまた、そうした消費者にとって自己が自己であるために不可欠の財を提供してくれる生産者は大切な人である。生産者の側から見れば、本来の労働は、自らが他者からそのように親愛の情をもって認められていることを確認させてくれるものというわけである。しかるに、交換関係が人々の支配的な交流様式となり、貨幣を追求する営利労働が普及するということは、「貴君の需要と貴君の占有している等価物とは、私には同等の、つまりどちらでもかまわない名辞」となるという状況を生み出すことにほかならない。もはや自らの生産物が「貴君自身の本質、貴君の欲求の対象化」であって、貴君がそれを消費するのを見ることは自らの喜びでもあるといった想いは後景に退いてしまうのである¹⁷⁾。

かつ、うえにも見るように、こうした労働疎外論のキーワードが「等価物」であること、容易に理解されるところであろう。労働者としてであれ、消費者としてであれ、主体の個性の実現は生産物の具体的属性と不可分である。しかるに、「等価物」化するということはまさにそうした具体的属性が捨象されることにほかならないというわけである。しかも、この「等価性」が導出される論理は以下のよう

14) この点には、宇野氏の価値尺度論は結局「価値法則に仕える」だけに終わっている、ないし「全体の経済を調節する手段として機能」しているにすぎないという厳しい批判も向けられることになっている。片岡浩二「純粋な流通形態の位相」157-158、164-168ページなど参照。

15) M.ウェーバーの理念型との差異として、宇野氏がしばしば強調するところである。宇野弘蔵「経済学における歴史と論理」『宇野弘蔵著作集第四巻』前掲書、所収、36ページなど参照。

16) K.マルクス『資本論』前掲邦訳、312-313ページ。

17) K.マルクス、杉原四郎/重田晃一訳『経済学ノート』未来社、100、112-18ページ参照。

であった。すなわち、交換関係においては「私有財産は他の私有財産と関係づけられ、これと等値されている」。ここでは私有財産は他の私有財産の「同等物」として現象し、「他者の代理人として相互に関係しあう」。つまり、相互に他者の「代理物」、「等価物」となってしまう¹⁸⁾と。

ここに見られる推論、すなわち「等値」という関係のあり方は具体的属性を捨象するものであることへの着眼が、『資本論』冒頭での価値実体論の導出方法に通じること、敢えて指摘するまでもあるまい。と同時に、価値実体の論証としては不成功であったが¹⁹⁾、マルクスとしてはそうした導出方法を通じて価値実体としての「抽象的人間労働」の歴史的な性格を特定しようとしていたことも浮き彫りされてくる。だからこそ、価値実体について再論した冒頭章の終末近くにおいて、古典派経済学者の歴史意識の希薄さに対する批判と絡めて、彼らが「価値となって現れる労働を、その生産物の使用価値となって現れるかぎりでの同じ労働から、どこでも明文と明瞭な意識とをもっては区別していない」こと、「諸労働の単に量的な相違がそれらの質的な一元性または同等性を前提し、したがって諸労働の抽象的人間労働への還元を前提するということには、古典派経済学は考えつかない」ことを痛烈に批判していたのである²⁰⁾。しかも、本節冒頭で論及したように、この古典派経済学者の歴史意識の希薄さに対する批判はまさに価値形態論、貨幣論に直結するものであった。

こうしてみると、『資本論』の価値形態論、貨幣論は価値実体論を先行させたがゆえにそのエッセンスを曖昧化するところを否めなかったが、まさに

そうした価値実体論を生んだ推論は、若きマルクスの哲学的、社会学的洞察を含んだ経済学研究と相通じるところを有していたということがわかる。つまり、『資本論』は、学際的に開かれた経済学としての懐の深さを孕んでおり、アグリエッタらが着眼した論点とも対話しうる契機を備えていたと解されるのである。但し、上述のような考察は、その本質を所与とした「人間」を前提とした立論となっているという点では、構造主義やポスト構造主義とは相容れないものとなっていることも看過されるべきではないであろう。

III 貨幣論と現代思想

貨幣的アプローチは、レヴィ=ストロースのゼロ記号論を想起させるところがある。じっさい、同じく貨幣を外在的、超越的に導出した吉沢氏の貨幣論はまさにレヴィ=ストロースに倣って展開されていた。すなわち、「全体」と「部分」とをあらゆる精神作用にとつての「アプリオリな二契機」とみなし、「人間はこの型式にすべて埋め込まれている」と解したうえで、商品世界においては、「部分」としての諸商品に意味を与えこの世界を秩序づける「中心」、「要素となった全体」、「ゼロ記号」こそが貨幣にほかならないと捉えられる。しかも、「中心のない型式から中心のある型式を生成させることはできない。……全体は部分によって生成させられない」と解されるわけである²¹⁾。

のみならず、吉沢氏は、スミスの交換性向=人間の本性説を再評価しながら、経済学の原型をロビンソン物語に求める通例の経済学的思考を鋭

18) 同上邦訳、102ページ。

19) 従来から批判されてきたように、等値からだけでは抽象的人間労働に絞り込めない。マルクス自身も冒頭章最終節ではロビンソン物語を援用して社会存立の基盤としての労働配分問題が価値実体論の基底に存していることを明らかにしている。

20) K.マルクス『資本論』前掲邦訳、148ページ。

21) 吉沢英成『貨幣と象徴』日本経済新聞社、1981年、113-115ページ参照。

く批判し、人間は本質的に交換を求める存在であることをも経済学の原型に組み込むべきことを主張している²²⁾。上述の貨幣論は、レヴィ=ストロースに倣いつつこの交換認識を活用したものである。

こうして、吉沢氏は、労働=生産過程のみを社会存立の実体的基盤と捉える宇野氏に対して、流通過程も実体的基盤としての側面を有しているという見解を対置した。と同時に、レヴィ=ストロースに倣った吉沢説は、流通過程が有する実体的基盤としての側面をただちに「交換」と捉えて、「交換」はその実体的基盤がある歴史段階で受け取る「形態」ではないのかという論点を掘り下げようとはしていなかったことにも留意しておこう。

これに対して、アグリエッタらは、一方で、生産世界から自立した流通世界独自の問題として貨幣論を定立しようとした点で、吉沢説と相通じるところを有している。他方で、貨幣論をそうした実体的基盤が歴史過程のなかで帯びることとなる特殊な形態の問題として解き明かそうとしている点では、構造主義の没歴史性、静態性を批判したポスト構造主義に与するところを有していた。

すなわち、アグリエッタらは、その実体を労働に見るにせよ効用に見るにせよ、価値を前提としてしまえば、「価格はそれに先立って存在する同質性を反映したものにならなくなり、「価格は制度を打ち立てる機能をもたない」こととなる。こうした観点は「貨幣問題を従属化する」ことにほかならないと批判する²³⁾。あるいは、価値実体論を前提とすれば、「社会の首尾一貫性があらかじめ前提されている」こととなり、「貨幣は非本質的なものとして斥けられる」とも批判している。逆に、「価値が先在するという仮説を斥ける」ならば、「経済主体が社会化

される様式が、もはや所与ではなくな」って、「経済主体の社会化それ自身が問題となる」²⁴⁾。そして、貨幣こそ「商品秩序において社会統合を打ち立てる原理」²⁵⁾というわけなのである。なお、こうした価値実体論批判に関連して、「貨幣とは、言語として構造化されたシステム」だとする構造主義者の貨幣論を「経済諸関係をもはや自然的関係とみなしてはいない」ないし「経済諸関係を支配しているのは社会制度」であることをたしかに捉えているという点で、軽んじてはならないと評価している²⁶⁾ことをも付言しておこう。

他方で、アグリエッタらは、「貨幣関係は特定の社会のなかに帰属している」、ないし「貨幣制度は、人類全体に妥当するような唯一にして同一の普遍的な貨幣の歴史に由来するのではない」とも解している²⁷⁾。したがって、構造主義を上述のように一面で評価しつつ、その没歴史性を厳しく批判してもいる。構造主義が提起する基本的社会関係は、「自己同一性を保持したまま」であって、「いかなる矛盾の原理をも組み入れてはいない」。それでは、社会諸関係の「発生」を解明することができないし、「社会の変遷」を説明することもできない、²⁸⁾と。むしろ、この点では、マルクス主義が「貨幣の中に歴史的な日付をもった特殊な社会化の様式を見て取」ったことをその「本質的な寄与の一つ」と高く評価しているのである²⁹⁾。

こうしたアグリエッタらの貨幣論のうち、価値実体論を前提してしまえば貨幣問題を従属化させるという主張について言えば、労働と労働との関係がなぜ貨幣を介した価格関係として現象せざるをえないかを解き明かそうとして価値形態論を展開したマルクスからすれば、無理解な批判ということになる。また、価値実体を先在させないからこそ

22) 同上書、33ページ。

23) M.アグリエッタ/A.オルレアン「貨幣の暴力」前掲、xii-xiii、74ページ。

24) 同上邦訳、8-9ページ。3ページをも参照。

25) 同上邦訳、xiiiページ。

26) 同上邦訳、9ページ。

27) 同上邦訳、70ページ。

28) 同上邦訳、22ページ。

経済主体が社会化される様式を問うことができるという主張も、マルクスが直上のように価値形態論を通じて商品経済に固有の社会化の様式を解き明かそうとしていたことからすれば、やはり強引に過ぎよう。だが、前節で見たように、価値実体論を先在させたことが価値形態論のエッセンスを曖昧化させていたことも事実である。さらに、価値実体論を前提とすれば社会の首尾一貫性をも前提することになり、貨幣論の意義が薄れるという主張は、前節で見たようにマルクスの価値尺度論にも妥当するところがある。但し、これは、やはり前節で確認したように、宇野説のようにも乗りこえられるものであって、ただちにマルクスが切り開こうとした商品貨幣論の放棄を促す欠陥ではなかった。

こうして、アグリエッタらはマルクスの貨幣論を十分に説得的に論破したうえで自説を提起しているとは解しえない。むしろ、アグリエッタらが商品所有者たちの社会化の様式の焦点と捉えているものが価値実体論からは生まれようがないものとみなされていることと結びついて上述のような批判が生まれていると解される。そのキーワードが「主権」であり、「規範」である。すなわち、アグリエッタらは述べている。「商品の共同体が打ち立てられるのは、さまざまな私的評価のあやふやな一貫性を通してではなく、貨幣関係に含まれた慣習的な評価を受け入れることを通して」である、と。換言すれば、個人主義が全面的に開花する世界における個人の社会化は経済合理的な「契約」のみをもってしては説明しえない。そこには「規範」という個人を超えた社会的な力が働いている、と。しかも、その力は満場一致での承認とその突き崩しの動きという「両義性」に曝されている。つまり、

支配とともにその崩壊と再建が問われる存在である。貨幣とはこのような力を担った「(商品経済のもとで)社会統合を打ち立てる原理」であり、そうしたものとして「主権」と呼ばれるに相応しいというわけである³⁰⁾。

こうした商品経済のもとでの社会統合様式が孕む「規範性」を取り扱う契機を宇野氏の価値尺度論は潜在的に内包していなかったのかということが、アグリエッタらとの間での大きな争点となる。ともあれ、次節でそれを問う前に、「規範性」が投げ掛ける論点を現代思想の提起している方法論の問題として、ドッド、柄谷氏に即してもう少し追求してみよう。

すなわち、ドッドは、「貨幣の観念は、貨幣の用い方を規定するもとなる力であり、それによって貨幣そのものが果たす機能が支えられる」ないし「貨幣についての情報は、貨幣自体とまったく別物であるとは言え」ないと主張する。そもそも情報は、「ただ『伝達され』『受け取られる』にすぎない」媒介的役割に留まる存在ではなく、むしろ「情報の意味も有効性も……情報が解釈される過程にいつも依存している」のであって、「情報を伝達し、受け取ることは……事実を事実として生み出すことでもある」というわけである。さらに、ドッドは、「貨幣ネットワークには、貨幣を使う人々の貨幣認識の仕方に深く入り込んでいる重要な信用の次元がある。これは、……文化的で政治的な問題でもある」とも述べ、そこには「信念、迷信、神話」なども関与することを認めている³¹⁾。

こうして、ドッドは、言語や観念はそれに先だって厳然と外在する対象世界を単に描写するという役割を演じるものではなく、むしろ言語や観念を通して対象世界が構造化されてゆくと捉える構築

29) 同上邦訳、16ページ。

30) 同上邦訳、x-xi, xiii, 26-27, 68, 174-176ページなど参照。

31) N.ドッド、二階堂達郎訳『貨幣の社会学』青土社、1998年、238ページ。185-186ページをも参照。

主義に立脚している。また、貨幣についての観念をめぐって単に経済的な関係を目をやるのではなく、きわめて広範な視野を設定している。これら2点が「規範性」に結びつくものであることは容易に理解されるところであろう。

こうした構築主義的認識論に立脚し、かつ現前する「規範」をたえず問い直し、揺さぶろうとするのが柄谷氏である。そのようにしてテキストに内包された微細な差異に目をこらしながら通説を問い直し、「価値形態論において『まだ思惟されていないもの』を読む」み込もうとした柄谷氏の価値形態論の読解は、筆者にはやはり強引過ぎるものと解される³²⁾。だが、「教義はすべて、『断片』としてのテキストを透明なものにしてしまうような『全体』としての意味にほかならない」と解し、換言すれば明快なまとまった意味を持つ全体ないし体系としてきれいに整理してしまおうとしてもじつはどこかに捉えきれずにこぼれおちたものを残さざるをえないと解し、そうした「教義」をたえず揺さぶろうとする柄谷氏の問題提起³³⁾は、デリダの脱構築論を想起させるとともに、価値尺度論にとっても、さらに価値実体論にとっても興味深いところをもっている。

こうして、吉沢氏やアグリエッタ、ドッド、柄谷氏らの貨幣論は構造主義からポスト構造主義という現代思想の動向と絡めて捉えうるものであることがわかる。したがって、マルクスが切り開き、宇野氏が継承しようとした貨幣論の孕む現代的可能性を検証しようとするれば、それが現代思想からの認識論的、方法論的問題提起に対してどのような回答を用意しうるのが問われることとなる。本節での考察に従えば、具体的には、まず、価値形態論の基底に認めるべき実体的ないし基盤的關係は、生産の世界を離れて、人と人との交流の世

界に求めるべきではないのかという論点をめぐって回答が問われる。さらに、そうした実体的ないし基盤的關係にせよ、それが歴史の特定の段階で受け取る特殊な形態にせよ、構築主義的に捉えられべきものではないかが問われる。くわえて、それらはたえず脱構築され、揺さぶられるべきものではないのかといった論点をめぐっても回答が問われることとなるというわけである。

IV | 宇野説を超えて

前節末に小括した課題への回答を検討する前に、まずマルクスの価値・価格論における用語の混乱を、ひいてはそれを導いた資本主義経済システム像についての誤認を正しておこう³⁴⁾。

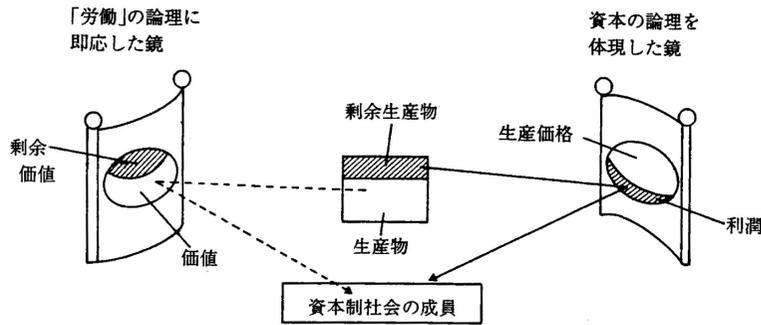
すなわち、マルクスは、資本主義的商品経済の下での価格運動の重心は生産価格であって、個別商品についてみれば価値価格とは一致しないことを熟知していた。のみならず、リカードと異なって、生産価格と価値価格とは現象とその基底に潜む本質的關係として明確に次元を異にする範疇であると位置づけていた。だが、生産価格は社会的総剰余価値の諸資本への平均利潤としての分配の所産であって価値から導出されるものであり、さらに社会的総計として価値と生産価格、剰余価値と利潤とは合致しているのだからと解して、異次元ではあるが直接的に接合しているものと描いていたのである。

この点は宇野説においても変わらない。個別資本間での競争論次元とその基底に存する総資本と総労働との関係次元というように次元を区別しつつ、やはり生産価格を価値価格から直接的に導出していた。

32) ソシユールを援用して使用価値の差異化を主題とした貨幣論を展開しているが、貨幣の導出は私的所有者が社会を織り上げてゆくさいに発生する交換者の力の非対称性をこそ焦点化すべきと筆者は解している。

33) 柄谷行人『マルクスその可能性の中心』講談社、1978年、9、12-13、15-17、20-21、31-32、41-42など参照。

34) 価値と生産価格との関係を異次元間接接合と捉える以下の所説については、拙著『価値論のポテンシャル』昭和堂、1991年、第1章2、第3章、第4章、補論などを参照。



図

だが、周知のように、価値から生産価格を導出する方程式において投入商品の価格をも生産価格化するならば、価値と生産価格及び剰余価値と利潤との総計一致命題は特殊な条件を前提しない限り両立しない。さらに言えば、この方程式は、価値を想定せずとも物量単位での投入・産出関係と利潤をめぐるしのごをけずるという資本の論理を前提すれば生産価格水準は同定しうを示していた。要するに、価値と生産価格とはマルクスが想定したように直接的に接合する関係にはないということである。

といっても、上記のところは価値論が無用の長物であることを示すものではない。生産価格は資本主義の下で諸資源の配分を選択するさいの指標なのであるから、上記のところは、資源配分という社会存立の基盤的課題が、資本主義の下では、増殖をめざすという資本に固有の特殊な論理に規定された指標を用いて遂行されていることを表すものにほかならない。したがって、資本主義経済システムの歴史性に鈍感でおられないとすれば、生産価格体系の同定で事足りると済ますわけにはゆ

かない。むしろ、社会存立の基盤に即応した、より普遍的な資源配分指標との関わりにおいて生産価格体系の意味するところを読み解く必要がある。そして、この社会存立の基盤に即応した、より普遍的な資源配分指標を実体とする概念を価値と呼ぶとすれば、価値と生産価格とは上図のような関係で捉えられることとなる。

すなわち、中央に生産物総体が位置する。それを資本の論理を体現した鏡に映して評価すれば右方の生産価格体系が目映じてくる。それに対して、社会存立の基盤に即応した論理を体現した鏡に映して評価すれば左方の価値体系が現れるというわけである。マルクスの解したところとは異なって、右方の生産価格体系は左方の価値体系を迂回してはじめて導出されるものではない。むしろ、中央の生産物総体に内包された投入・産出関係³⁵⁾と資本の論理を媒介として直接に生成する。こうして、価値体系と生産価格体系とは、それぞれが体現する論理に即して次元を異にしつつ、資源配分指標という共通の機能に即して照応関係を追求しうるものとして異次元間接接合関係にある

35) 貨幣的アプローチを主唱する論者、さらにアグリエッタらもこれを純粋に技術的關係と解しているが、賃金水準によっては敢えて労働集約的な旧式技術を用いることがあるというように、投入・産出係数自体も社会関係を内包している。

と解されるのである。

資本主義は、単なる経済システムに留まらず、資本主義社会という独自の社会を歴史的に成り立たしめた。したがって、社会存立の基盤的課題の遂行をも担うこととなった。この点からすれば、マルクスが想定したように、資本主義経済システムにおける資源配分指標としての生産価格体系は社会存立の基盤に即応した指標としての価値体系と直接的な接合関係を保持しても不思議ではない。むしろ、その方が自然である。にもかかわらず、生産価格体系は価値体系からいちおう自立して成り立っている³⁶⁾。つまり、資本主義経済システムはマルクスが想定していた以上に特殊な、ないし特異な経済システムということである。

のみならず、生産価格体系が自らの論理でそれなりに自己完結的な世界を構成するということは、生産価格体系がある種のメタシステムとして、固有の論理を孕んだメゾシステムを柔軟に包摂する懐の深さを備えていることをも意味する。たとえば、女性は家庭を居心地よく整えることを第一の役割とするというジェンダー意識が支配するメゾシステムをそのままに包摂して、安価に主婦の労働力を組み込んだ生産価格体系を構成することができるのである。この点は民族や人種に関わるイデオロギーにも妥当すること容易に推察されるであろう。資本主義が世界の諸所で多様に展開される所以である。と同時に、資本主義の発展が自動的に近代の掲げた人間の解放を実現するものではないことを開示するところでもある。むしろ、資本主義社会として現実化した近代という時代は、そもそも普く人間を解放する駆動力を必ずしも備えてはいなかったということである³⁷⁾。

こうして、異次元間接接合説に立脚したとき、これまで流通形態論において価値と呼ばれていた概念、すなわち各商品が保有し、貨幣を媒体に価格として現象する概念は、新たな呼称を与えられなければならないこととなる。交換価値という呼称がふさわしいとも思えるが、マルクス派経済学においてはこの呼称には既に固有の意味が付着している。そこで、どれほどの他商品と交換しうるかを示す力という意味で、これを交換力と呼ぶこととしよう。したがって、価値形態論は正しくは交換力形態論、価値尺度論は交換力尺度論ということになる。

こうした認識を前提に、前節末で小括した課題への回答に立ち返ってみよう。まず、生産の世界を離れて流通の世界にも人間社会にとっての固有の実体的ないし基盤的關係を認めるべきか否かという論点について言えば、回答は然りということになる。

マルクスの価値形態論においても、そのエッセンスは、私的所有者たちが社会を織り上げようとするときいかなる特権者を生み出さざるをえないかということであった。かつ、宇野氏の価値形態論が示しているように、価値実体論、したがって生産の世界についての考察を留保し、ひとまず流通形態の考察に純化しても、それは十全に論じることができた。さらに、価値と交換力との異次元間接接合説からすれば、そのように交換力にまつわる主題を固有に取り上げることは必然的でもある。のみならず、この主題の基底に、人間は時代を超えて社会的に交流してゆく存在であるという基盤的關係を認めることにもならんら問題はない。若きマルクス自身、使用価値的側面からではあるがこうし

36) 現代の地球環境問題があるいはそうであるように、左方の鏡に映じる像が、いわば鏡をはみ出すようなかたちで社会存立の基盤に即した論理から見てあまりに逸脱がゆき過ぎたり、あるいは人権無視のグロテスクな像を映じるようになったりすると、ふだんは右方しか意識しない人々も左方に反応するといったことはある。

37) たとえば、女性差別は近代化が遅れていて前近代の遺制が残存しているがゆえの現象ではなくて、近代に独自の仕組みを通じて再生産されているのであり、したがってこの仕組みを打破しない限り女性の解放はありえないことに気づき、それまでの近代化の光を女性にもというフェミニズム運動と質的に転換した第2波フェミニズム運動が1970年前後から展開された。

た認識に関わる問題を掘り起こそうとしていた。但し、それは吉沢氏のように交換＝人間の本性と捉えることではない。交換はあくまで社会的存在としての人間にまつわる基盤的関係が商品経済という歴史の特定の段階で受け取る特定の形態であって、基盤的関係はそれとは異なる範疇で表現されなければならない。上記のところでも敢えて交流と記した所以である。

ついで、歴史的、特殊的形態としての交換関係であれ、その基底に見出される交流関係であれ、構築主義的に捉えられるべきものではないか、さらに異次元間接接合説は各次元の経済的範疇のそうした構築主義的性格を捉えうるのかという論点に移ろう。

交換関係、ひいてはその核心としての貨幣について言えば、宇野氏の価値尺度論、本稿で言えば交換力尺度論は、本来的には上記の設問のいずれにも然りと回答しうる可能性を孕んでいたと解される。すなわち、宇野氏はせつかく交換者の私的性格を焦点化しながらそれをもつばら量的側面に限って適用しているが、私的という性格は交換者がそれぞれに持つ物差しの質つまり規範性に関わる問題にも適用されるべきであろう。そうすれば、個別的物差しの質自体が決して事前に統一されているものではなく、むしろ交換過程を通じて取捨選択されてある程度絞られてゆくものであることが明らかとなる。そういう物差しは暴利をむさぼるものだとか、許容範囲だとか、あるいはそもそもそういうものまで売買の対象として尺度しようとする物差しは認められないとかというように、交換過程を通じて当該市場で正統性を認められ、通用する物差しが絞られてゆくのである。しかも、これが

交換力尺度論における単なる抽象的可能性の問題に留まらず、資本主義的商品だからこそむしろ現実的意義を帯びてくることは、異次元間接接合説の核心である生産価格関係のメタシステムの性格、換言すれば、包摂するメゾシステムの多様な論理をある程度許容するという懐の深さが示すとおりというわけである。さらに、こうした交換力を尺度する物差しの質をめぐる社会的判断がたえず揺さぶられ、再構築されてゆくことは敢えて断るまでもないところであろう。

では、交流という基盤的関係についてはいかに回答されることになるであろうか。ここでも社会的存在という高度に抽象的な規定は揺るがないとしても、その内容は構築されて構造化されるものであり、また揺さぶりと再構築の過程に曝されてゆくものだと解される。

たとえば、既述したマルクスの疎外論は人間についての興味深い洞察を孕んでいる。現代がJ.ボードリヤールの言う記号消費スタイルの氾濫する社会だからこそいっそう興味深い。だが、それが交流についてのひとつの構造化であることに変わりはない。記号消費をどう見るかという点でも、他者のまなざしへの関心は人間が社会的動物であることに根ざした基盤的性格をも帯びているという見方も当然に存在するわけである³⁸⁾。そして、どのような構造化が各時代、各地域における「人間の社会的存在性」をもっとも豊かに照射しうるかはたえず問い直されてゆくべき課題ということになる。

この点は価値実体についても異ならない。前掲の図では、価値実体の規定要因を「労働」と表したが、「人間にとっての費用」の内実が労働のみとは限らない。そもそも労働自体、どのような意味で

38) たとえば言語哲学者の丸山圭三郎氏は文化が人間の動物としての生存条件(身分)を超えた、その意味で過剰な差異化(言分)から発していることに注目し、いわゆる記号消費が超歴史的側面を有していること、さらにいまでは私たちの身体自身が文化化し、単純に自然に帰れといった言説は成り立たないことにも注意を促している。丸山圭三郎『フェティシズムと快楽』

紀伊國屋書店、1986年、69-70、78ページ以下を参照。

費用なのかと問えば、スミスの煩勞という意味もあれば、機会費用としての時間の費用性というマルクスの労働価値説にも伏在していた³⁹⁾意味も見出されるというように多重的である。

さらに、現代的には、再生不可能な資源の費消は将来世代にとっての費用として算えられるべきものである。のみならず、環境問題からすれば、「人間」にとっての費用のみを問題視してよいのか、そうした人間中心主義を反省して生態系の存続を基盤的關係として捉え、それに即した費用をも算入すべきではないかといった見解も浮上してきている。

こうして、価値実体についてもその構造化のあり方はたえず揺さぶられ、再構築されていってよいし、またそうあるべきと解されることとなる。

V 結びと展望

こうして、マルクスが切り開こうとした貨幣論は、宇野氏が構想した原理論構想の意味を突き詰め、その潜在的可能性を掘り起こしてゆけば、アグリエッタらが提起していた、貨幣の帯びる規範性や学際性、さらにその背景をなす構築主義的認識論、方法論とも対話しうる、今なお興味深い理論であることがわかる。ちなみに、そうした規範性や学際性は、若きマルクスの経済学的探求と不可分のものであり、『資本論』にいたるまで決して消失してしまうことのない契機であることも確認できた。

但し、それは若きマルクス⁴⁰⁾が行っていたように人間の本質を所与のものとして前提してのことであるべきではない。交換力尺度論すなわち当該市場で正統化される交換力の物差しの質はどのようなものなのか、したがって当該市場はどのような質の

市場なのかを問う理論においても、価値実体論すなわち資本の論理を超えて、社会存立の基盤的課題に即した費用としてどのようなものが算えられるべきなのかを問う理論においても、今、この社会ではどうなっているのか、あるいはどうあるべきなのかがたえず問いかねられなければならない。

こうして、貨幣論は、グローバル化が顕著に進む現代において世界で、また日本で正統化されている交換力の物差しはどのような質のものであり、またなぜそうした質のものが流布することとなるのかをたえず問い直させる契機をなす。さらにその延長線上では、現代において社会存立の基盤に即した費用として算えられるべきものは何なのかをたえず問い直すことが私たちの課題となってくるというわけである。と同時に、そうしたたえず問い直しが決して相対化の戯れに墮すべきものではないことも確認しておこう。

【付記】

「実学」の学は哲学の学であるという教えを胸に、拙いものであるが本稿を小栗誠治教授に捧げます。

39) この点を経済本質論として丹念に掘り起こしたのが杉原四郎氏であった。『杉原四郎著作集 I』藤原書店、2003年、「Ⅲ 経済の本質と労働」参照。

40) マルクスはやはり近代の人であって、生産力の発達に対する楽観的な期待のように、

その負の特質も分かち持っている」と解される。

「人間」とはという思考スタイルもそうした一面であろう。

したがって、『フォイエールバッハテーゼ』や

『ドイツ・イデオロギー』を分岐点とした明確な

認識論的切断というのは、少し強引な解釈ではないかと

解している。

On Methodology of Money Theory

Naoki Umezawa

Today, movements of global money often disturb the world economy. That means “what’s money?” becomes the critical issue to understand the economic situation in our times. But standard economics does not take up this kind of question. On the contrary, heretical economic theories have sometimes shown attractive approaches to this question.

One such approach was Marx’s money theory; but it had a defect. To solve this problem, two types of approach have been proposed. On the one hand, Kohzoh Uno proposed a methodological device which was relatively close to Marx’s original theory. On the other, Michel Aglietta, Andre Orlean, Hidenari Yoshizawa, Kohjin Karatani and others proposed a socio-economic approach connected with modern philosophical thought, namely structuralism and social constructionism. These two approaches seem radically different, but I think Uno’s methodological device has potential adaptability when fully developing its connotation.

This paper attempts to fully develop the connotation of Uno’s methodological device and to confirm whether there is a relatively close relationship between the two approaches to overcome the defect of Marx’s money theory. In other words, this paper considers money theory to confirm whether Uno’s methodological device has a relatively close relationship with modern philosophical thought.